

学修成果の質保証に向けた外部評価モデルの提案

1. 問題の所在

- ① 変化が激しい社会では、答えが定まらない課題に自ら主体的に取り組む意欲と、論理的・批判的思考力、合理的判断力、自分の考えを論旨明解に表現する力、多様な価値観を持つ人と協働して新たな価値創造に関与できる人材の育成が求められております。
- ② 第3期教育振興基本計画の答申で指摘の通り、高等教育段階では「問題発見・解決能力の修得」が目標として掲げられ、「新たな知識・技能を修得するだけでなく、学んだ知識・技能を実践・応用する力、さらには自ら問題の発見・解決に取り組む力を育成することが特に重要である。このことを通じて、自主的・自律的に考え、また、多様な他者と協働しながら、新たなモノやサービスを生み出すなど、社会に新たな価値を創造し、より豊かな社会を形成することのできる人材を育成することが重要である。」としています。
- ③ これまでの「教える」という一方向的な知識伝達型の教育から、学生が主体的に問題を発見し、解を見出す「能動的学修」への転換が不可欠であり、教員と学生、学生同士、学生と地域社会や企業等の関係者による議論・対話や実践的な体験を通じて、思考力・判断力・表現力を中心とした学びの実質化が要請されており、出口管理の厳格化が課題となっています。第3期教育振興基本計画の答申においても、「大学教育を通じて「学生がなにを身に付けたか」という観点を一層重視するとともに、いかなる評価の基準や方法に基づいて、個々の学生の学修成果の把握・評価を行い、大学として卒業を認定・学位を授与したかについて、社会に対して説明責任を果たすことが求められる。」としています。
- ④ 学修到達度の測定・評価は、これまで知識の修得を中心とした傾向が多く、結果としてその場しのぎの試験対策に終始した学修を誘発してきましたが、平成29年度より大学はディプロマ・ポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの明示が義務づけられたことにより、学修成果の質保証として社会から信頼される客観的で通用性のある評価方法が喫緊の課題となっています。

2. 外部評価モデルの提案

(1) 外部評価導入の意義

これまで、知識の量及び内容の理解、技能の正確性が学修成果における評価の中心とされてきましたが、今後は知識・技能の獲得に加えて、主体的に問題を発見し、解決に取り組む能力として、思考力・判断力・表現力の獲得と主体性、多様性、協働性が評価の重要な要素として求められています。

知識・技能の評価は、各学問分野で範囲や水準が整理又は標準化されていることもあり、授業担当者の判断で客観的に学修到達度を判定することができますが、とりわけ考える力や表現する力の評価は一樣ではないことから、客観性及び社会的信頼性を確保する方法として外部の第三者による判定が不可欠となります。

(2) 外部評価モデルの仕組み

1) モデル構想の背景

医療系大学間で実施している知識・技能の能力をネット上で客観的に評価する共用試験と、イギリスで学位判定に実施している外部試験員制度による口頭試問による外部評価を参考に、本協会 ICT 活用の見地を組み合わせることで学修課程の外部評価を構想しました。

2) モデルの仕組み

① 評価組織の構築

学修課程の分野別又は分野合同の外部評価コンソーシアムを大学又は関係団体等に設置し、社会の有識者も参加した評価組織を構成します。

② コンソーシアムの役割・機能

コンソーシアムに「外部評価検討会議(仮称)」を設置し、評価者の適格性基準の策定及び確保、学修到達目標の確認・設定、学修到達度の評価基準(評価測定の

範囲・水準)と評価手法の設定と見直し、評価問題の厳選とクラウドへのアーカイブ、評価結果のフィードバック方法の策定、外部評価の運営に関する申し合わせ策定などが考えられます。

③ クラウドを活用した外部評価のイメージ

各大学及び社会の有識者による協力を得て作成した評価問題をクラウド上に多数ビデオ試問として掲載しておき、教室のパソコン等端末で学生がヘッドフォンや字幕などから問題を受け取り、記述方式でクラウドに回答を行います。

評価は、クラウド上で問題を作成した評価者と複数の評価者で一次評価を行い、その結果を踏まえて授業を担当する教員が到達度評価基準の方針に基づいて総合評価を行い、最終的に到達度の把握を行うことを考えています。

④ ビデオ試問による評価の意義と効果

- * 変化が激しい社会では、答えが定まらない課題に自ら主体的に取り組み、自分の考えを論旨明解に伝える・表現する力が求められておりますように、学修による対話の中で意見や考えを論理的・批判的・合理的な文脈に沿って、分かりやすく説明する力が要請されています。
- * それには、各学問分野で学修した知識・技能を実践的な課題に活用・応用して、問題発見・解決や価値の創造につながる思考力・判断力・表現力の訓練が不可欠なことから、口頭試問に替わる方法として、短時間で論旨明解な文脈で説明する訓練の一手段として、ビデオ試問による到達度の把握を考案しました。
- * 知識の量や正確性を測定する従来の内部評価に加えて、論理の展開力、知識・情報の関連付けによる多面的・多角的な考察力、適切に分析し最適解を見出す批判的な思考力、新たな価値を見出す創造力など、到達状況の把握を外部の第三者に求めることで、知識・技能の詰め込みではなく、知識・技能の活用・実践を経験する中で、問題の本質に真剣に向き合う学修を促すことが可能になると考えています。
- * また、授業を担当される教員は一次評価の結果を踏まえて、授業方法の点検・評価を行うことにより、授業の改善研究を深化し、教育指導能力の向上に結びつけることが期待できると考えています。

3) モデルの導入・活用方法

① ここに提案するモデルは、外部者による試験ではなく、学修到達度の進捗状況を点検・確認するもので、卒業までに学生が社会で求められる考える力や自分の考えを表現する力を身につけることを第一義としています。

反面、大学は学修成果として獲得した能力要素を社会に説明する責任がありますので、外部評価による結果は大学、学生にも大きなインパクトをもたらします。それ故モデル導入に際しては、学年進行の中で評価を経験させて訓練を行い、最終学年で学修成果の重要な指標として活用されることを想定しています。

② 本モデルは評価の対象・内容により、全ての分野に適応するものではありません。

例えば、美術・デザイン系分野の主な能力要素として、作品自体の独創性・芸術性、製作技術や社会貢献への価値などが重要となりますので、適切ではありません。また、知識・技能の量及び正確性を中心とする実技・実演・実習の教育、資格取得を目的とした教育の評価は、学内による評価又は学外機関によることが適切です。

そのため、各分野において、本モデルの適用可能性について検討する必要があります。

(3) モデル実現に向けた主な準備と課題

1) 外部評価コンソーシアムの形成

分野別のコンソーシアムは、当面、本協会の学系別 FD/ICT 委員会、サイバーキャンパスコンソーシアム運営委員会で構成し、外部評価検討会議で運営します。分野を横断するコンソーシアムは、上記の委員会で関連する分野が合同し、各分野数名から

なる委員で構成し、外部評価検討会議で運営します。なお、必要に応じて社会の有識者による参画を行います。その際、評価者の適格性について基準を作成し、大学に名簿の提供協力の依頼をしておく必要があります。

2) 学修到達度の評価基準の策定

本協会がとりまとめた分野別の学修到達目標を再確認した上で、学修到達度の測定評価の範囲・水準を設定します。なお、分野を横断する到達目標は、上記コンソーシアムにおいて改めて多分野で新たに策定する必要があります。

評価の手法は、評価項目に重み付けを行い、点数表示などによる比較可能な方式をとることが必要になります。

3) ビデオ諮問による共用評価問題の収集と蓄積

コンソーシアムの外部評価検討会議で策定した到達度評価基準に沿って評価の観点を実験し、適格評価者に評価の観点に基づくビデオ諮問の作成を依頼します。その上で、提供いただいたビデオ諮問について点検・厳選し、外部評価クラウドに蓄積します。外部評価クラウドは、賛助会員の協力を前提に可能性を打診します。

4) 回答結果のフィードバック

外部評価コンソーシアムは、評価結果をフィードバックすることで、考える力、表現する力を自主的に振り返らせることにより、卒業までに問題発見・解決力、価値創造に参与する力の向上を訓練するため、論理の展開力、知識・情報の関連付けによる多面的・多角的な考察力、適切に分析し最適解を見出す批判的な思考力、合理的な判断力、科学的思考力（観察、規則性を見出し、データ分析、類推・因果・帰属推論など）の観点から、記述回答の内容を評価し、達成度をレーダチャート化してフィードバックする仕組みを検討する必要があります。

5) モデルのパイロット事業構想の策定

外部評価モデルの実現性を検証するため、本協会の学系別 FD/ICT 委員会、サイバーキャンパスコンソーシアム運営委員会を母体に外部評価モデル検討小委員会を構成してパイロット事業構想を平成31年度に策定し、3年程度の年次計画で複数の分野で実験し、有効性及び課題の洗い出しを行い、改善を繰り返す中で外部評価モデルを段階的に整備していくことが望めます。

外部評価コンソーシアム

